

「心が折れてしまう…」

と、うめくように呟く声をしぼり出す、
初老の女性は、ダンナさんが病気だ、
とも言っていた。

今年の始めに地震の被害にあい、避難所での
暮らしを余儀なくされ、この度の水害でその避
難所が又、暮らすことが叶わない状況になっ
てしまった能登の、ニュース報道のヒトコマだ。

「頑張らないわけにはいかない…」

と、女性は、もう一言、呟いた。

私は、私たちは、なんにも出来ずに傍観する
デクノボウの自分を持てあましながら、黙っ
てしまう。

映画『大好き ～奈緒ちゃんとお母さんの50年
～』の主人公は、てんかんと知的な障がいを持
つ姪っ子“奈緒ちゃん”であると共に、私の姉で
ある“お母さん”でもある。

幼い頃、障がいのある奈緒ちゃんを産んだこ
とに強い自責の思いを抱き、医者に「長くは生
きない」と言われたことに大きなショックを受
けた姉も、それこそ「心が折れた」体験をした
一人に違いない。その姉が一番大変だった時
にも、私はデクノボウだったように思う…。

頼りにならない弟だった。

奈緒ちゃんが小学校に入り、少しずつ元気に
なり始めた頃になってやっと、「元気な奈緒
ちゃんを撮る」ということだけの想いのホーム
ムービーを創ろう、という“思いつき”のような
企画を考え、撮り始めたのが『奈緒ちゃん』の
映画の始まりだった。

奈緒ちゃんが生まれ出て、9年目の正月まで、
「長くは生きない」と言われた奈緒ちゃんのこと、
必死になって生かして育てようとしてきたお
母さんのことを、見て見ぬふりをし続けてきた
自分が居て、9歳から50歳までの42年間の奈緒
ちゃんとお母さんを撮り続けてきた自分が居る
…というのが、正直なところだ。

時々、「50年も撮影を続ける…なんて立派で
すねえ」と言われると、「全然、立派なんか
じゃないんだよ…」と言いたくなる。

二年程前から『大好き』の撮影で、奈緒ちゃん
のお母さんの話を聞くことを何度となく繰り返
しながら、あの見て見ぬふりをしていた頃に、ち
ゃんと姉の話を聞いてあげてたら、どんなに力に
なっただろう…今更遅い、という思いと同時に、
姉にとっても自分にとっても、50年の時間が必要
だったのだ、とも思い、編集作業で姉の話を受け
止める日々だった。

映画『大好き』は、なんにも出来なかったデク
ノボウの自分の罪ほろぼしの気持ちが創らせた映
画、とも言える気がする。

「心が折れてしまう」ような体験を繰り返した
姉のその記憶を、遅ればせながら聴き撮ろう…
それは奈緒ちゃんが50年生きた証であり、同時
に姉が確かに生きた証でもあるのだから…。

「いのちは生きる方向を向いているのだから」
と、奈緒ちゃんが生きてきた、お母さんが生き抜
いてきた、50年語りかけていると思ったから。

けれども、「心が折れてしまう」体験を自分の
こととして受け止めることは、本当のところ出来
ないのかもしれない…。

私はあなたではない。

私は私だ。

しかし、あなたのことを、私のこととして
どう受け止めたらいいのかを、
いつも想い続けたい。

どこまで想っても、私はあなたではない。

何も出来ない、何も言えないけど、

私は傍に居る。

そして、あなたは私の傍に居てくれる。

(伊勢真一「1.5人称の命」より)

ずっとデクノボウを生きてきた私が、
デクノボウを卒業することは出来そうもない。
デクノボウという在るか無きかの立ち位置で、
これからも映画を創り続けたい…
それしか出来ないのだから。